「鉄と鋼」と私

「鉄と鋼」と私のメルヘン

“Tetsu-to-Hagané” and My Memory in “Märchen of Steel”

安岡秀憲　JFEメカニカル（株）
代表取締役社長
Hidenori Yasuoka

私の自宅の机の上に黄ばんでしまった「鉄と鋼」と「ふぇらむ」の各一巻が置いてあります。日本鋼管本社の鉄鋼技術総括部時代に、銑鋼工程と次代の鉄鋼の技術開発はどうあるべきか、過去の技術開発の流れを勉強すべく何度も手にした2巻でした。意中の論文は、「鉄と鋼」Vol.81（1995）No.11三好俊吉日本鋼管社長の「鉄鋼技術の進歩発展と将来展望」と「ふぇらむ」Vol.5（2000）No.5王寺睦満新日鐵副社長の「1999年鉄鋼生産技術の歩み」です。素人にもわかりやすく概括的な内容でした。入社以来シームレスパイプの製造技術しか経験がなく全社の技術開発を総べる技術総括部に異動してきて間もない私にとっては、LD転炉、CCの導入、高炉へのPCI多量吹込み技術等、技術開発の歴史を理解する上で本当に勉強になった2巻でした。特に、トーマス転炉からLD転炉を実用化するときの経緯を記した鉄鋼技術の進歩発展の論文は後述するオーストリア鉄鋼協会での講演内容と重なり、私にとって忘れ得ない論文のひとつです。

さて、2000年の5月末に、オーストリアのレオーベン市において同国鉄鋼協会の75周年を祝うセレモニーが行われました。日本鉄鋼協会にも招待があり、当時の鉄鋼協会副会長で生産技術部門長である半明正之氏（第45代鉄鋼協会会長）が鉄鋼協会から派遣されることになりました。「日本およびアジアの鉄鋼技術の最近の動向」について基調講演を行うことになり、発表原稿の作成準備をさせられることになりました。どうせ手伝うなら、まえから夢見ていた鉄鋼の開発技術に燦然と輝くオーストリアの鉄鋼技術開発現場を訪れてみたいという強い思いがわいてきました。講演の通訳等何でもやる条件で上司の許可もおり、運よくかばん持ちで同行するということになりました。というのも、日本鋼管に入社するときに鉄鋼会社に就職するのだからなにかしらの鉄の本を買って勉強しておこうと思い、今から37年前の雪降るなか、クラーク会館の生協で買った二冊の本が中澤護人著「鉄のメルヘン」1300円・アグネ書房と「鋼の時代」でした。岩波新書の「鋼の時代」はどこへいったか所在不明ながら、「鉄のメルヘン・金属学を築いた人々」は当時も今も会社の机にしまってあるのです。その本の中に、まさしく、リンツ・ドナビッツのLD転炉法はもとより、「アルプス山中に生きる鋼の伝統」というそそられるセクションがあり、まさしくLD転炉の発祥の地をいつかは訪れたいものと強く思っていたのです。

そこそこの準備の後、半明さんと私は2人でウイーンから汽車で北アルプスの美しい大学町レオーベンに向かいました。午前中にレオーベンに着くと早速歓迎セレモニーがあり、遠くから来てくれたということで挨拶をさせられました。午後からは近くのビール工場のホールでウエルカムパーティーがあり、半明さんに出席してもらい、私は持参したパソコンで問題なくスライドが投影できるかチェックのためレオーベン大学の講演会場に赴きました。事件はここで起こりました。持参したパソコンをプロジェクターにつないでも乱れた画面しか出てこず、いろいろ設定を変えてみても一向に改善されません。18時過ぎには半明さんと合流する約束が19時になっても悪戦苦闘するものの解決できません。やむなし、バックアップのオーバーヘッドかスライドで対応しようと決心したとき、たまたまレオーベン大学の大学院の学生と出くわしました。友達に詳しい人がいるからと彼の研究室にパソコンを持ち込み、何回かのトライアルをして、無事映像を得ることができました。ほっとしました。急いでパーティー会場に駆けつけたところ、私の心配をよそに半明さんは、ビールで赤い顔をしてすっかりその場に打ち解けているではありませんか。

講演「Development Trends in the Steel Industry in Asia」は、LD転炉の究極の姿ともいうべきゼロスラグ吹錬を紹介し、2、3の現地からの質問も得て活性化した中で終わりました。私自身は、講演補助の合間をぬってMur川沿いの小さなレオーベンの町を散策したのが思い出です。朝早く散歩をす

48

るといたるところの小公園で箒を持ってボランティアで掃除をしているおじさん、おばさんに出くわしました。「鉄のメルヘン」の中に次のような紹介があります。「…レオーベンの町の、とある小さな公園には、19世紀ヨーロッパ製鉄の導きの星、ベーター・ツンナーの胸像がひっそりと立っている…」一瞬私も、19世紀のヨーロッパ製鉄の現場に足を踏み入れた錯覚に陥ってしまいました。

講演中にVoest-Alpineの幹部と意気投合し、翌日はレオーベンから200kmあまり離れたLinz工場を訪れました。ここでは最初のLD転炉の実験が行われたパイロットプラントの跡地をみせてもらいました。「今は古びた建物だけが残されていたが、実験に成功したときの技術者たちの興奮した姿が目に浮かぶようだ」とは半明さんの弁。

オーストリア鉄鋼協会75周年と鉄のメルヘンの旅をなしえた次の年、鉄鋼協会春季講演大会の中で中澤護人先生の記念シンポジウムが開催されました。私にとってのバイブルである「鉄のメルヘン」と鉄鋼協会が、そして「鉄と鋼」が妙に重ねあわされた時期だったなと感じている今日この頃です。

(2013年8月27日受付)